地域で学び、地域と共に歩む松本大学の今。

松本大学学報 蒼穹 sokyu

2014.9 Vol.116

色づきはじめたキャンパスは、後期が始まり活気にあふれています

特集 地域に有為な人材の育成をめざして
高大接続・高大連携 …… P.02

●「大学COC事業」による最近の取り組み

食育推進全国大会で学習成果を披露／『地域産品デザイン講座』開講 …… P.06

「買い物弱者問題」をテーマに、理論学習と実践活動を組み合わせた学びを開始 …… P.07

これから開催する大学COC事業による講座紹介 …… P.08

●総務省「地域の担い手創造事業」の全国モデル実証事業に「松本大学地域づくりコーディネーター養成講座」が採択 …… P.09

●部活動情報　女子ソフトボール部インカレ出場報告 …… P.14 ほか

特集

地域に有為な人材の育成をめざして
高大接続・高大連携

地域の若者を育て地域に定着させることを目的に掲げる本学にとって、高校との連携は重要な取り組みとなっています。高大連携については、全国の多くの大学が取り組んでいますが、なかには学生募集が目的となり、高校と大学が連携して若者を育てるという本来の趣旨から逸脱しているケースも見受けられます。本学では、高校と大学だけでなく、地域の協力を得ながら、「地域の将来を担う若者を寄ってたかって育てること」を目指して、高大連携事業に取り組んでいます。

（高大連携推進委員長・観光ホスピタリティ学科 教授　白戸 洋）

3つのタイプと、それを総合した連携学習による高大連携事業

本学の高大連携事業は、3つのタイプの事業によって進められています。

一つ目は、専門教科の学習を中心とした「高大接続型事業」です。穂高商業高校と松商短期大学部では、平成18年から「高校授業グレードアップ型講義」として、高校の講義を大学の教員が担当し、より専門的な学習や資格取得を支援しています。

二つ目は、高校が地域について学んだり、地域の活動に高校生が参加するために大学が支援する「地域との連携支援型事業」です。平成24年から、辰野高校の生徒が地元の商店街で開催する空き店舗を活用した活性化事業について、総合経営学部白戸ゼミの学生が運営への助言や接客等の研修を行なっています。また小諸商業高校や辰野高校と共同で、地域の食材や食文化を活かした商品開発を行なっています。

三つ目は、高校生を将来の地域を支える人材として育てるために、地域の歴史や資源を学び、地域の課題を研究しその解決を図る「地域人教育」です。平成24年度より飯田長姫高校（現飯田OIDE長姫高校）、飯田市と本学の3者で「飯田長姫高校地域人教育推進に関わるパートナーシップ協定」を締結し、3年間で7単位245時間のプログラムを実施しています。地域人教育とは「地域に愛着を持ち、地域を学び、地域に貢献する」人材を指します。これは全国的にも先駆的な取り組みとして注目されています。

そして平成25年度よりこれらの事業を総合した新しい連携学習「デパートサミット」を、長野県商業教育研究会が主催し、本学が全面的に協力して実施しています。これは、県内の商業を学ぶ高校12校の生徒を対象に、マーケティングについて理論と実践について学び、商品開発や人材育成を行なう「マーケティング塾」と、その成果を百貨店で発表し検証する「高校生合同販売会（デパートゆにっと）」によって実施されています。

取り組みの概要

高大接続型

- **高校授業グレードアップ型連携**
  大学が専門教科の学習を支援
- **大学授業チャレンジ型連携**
  専門科目を受講しながらキャンパスライフを疑似体験
- **高校活用型連携**
  本学学生の教育現場で学ぶ機会を高校が提供

地域との連携支援型

本学の地域との連携についての経験を活かし、高校の商品開発、まちづくりなどの地域連携活動を支援

地域人教育

「地域に愛着を持ち、地域を学び、地域に貢献する」人材育成を支援

デパートサミット

上記を集約。将来の地域社会を担う若者を育て、その力を地域に還元して地域も元気になる活動

マーケティングについて理論と実践について学び商品開発を行う「**マーケティング塾**」と
マーケティング塾の成果を発表し検証する「**高校生合同販売会（デパートゆにっと）**」によって実施

これらの事業では、いずれも**①「地域の若者を地域で育てて地域に返す」という理念に沿って高校と連携して地域の担い手を育てること、②高校生と大学生が一緒に学び、活動することで新しい価値や学びを生み出すこと、③若者が始めた取り組みが地域に定着する主体として高校が地域の中核になること**を大切にしています。

高校生が大学の授業を体験する「高大接続型連携事業」

本学の教育の中で、いわゆるビジネス系の専門教育は、商業系高校の専門科目分野である「マーケティング分野」「ビジネス経済分野」「会計分野」「ビジネス情報分野」とのつながりが強く、高校における商業系専門分野の延長線上にあると言えます。この分野を中心とした高校から本学への単発の出前講座の依頼は従来から数多くあり、本学の教員が出向いて高校生に講義を行っていますが、それと平行して、本学が体系的な高大接続教育への取り組みを行っています。これを始めたのは、穂高商業高校と本学との間で協定を結んだ平成18年からで、今年で9年目となります。この間、公立高校である飯田OIDE長姫高校、辰野高校、丸子修学館高校、私立の松商学園高校、エクセラン高校などとも連携しました。また、平成20年からは岡谷東高校とスポーツ健康学科が協定を結び、年間を通して、また夏と春の期間限定で定期的な連携事業を行っています。　（高大連携推進委員会委員・短期大学部長 山添 昌彦）

◉ 高校授業グレードアップ型連携

高校での簿記会計教育を充実・発展させるために、穂高商業高校において1・2年生の段階で日本商工会議所簿記検定2級を取得した生徒、あるいはそれと同程度の実力を持っている生徒を対象に、本学教員が高校に週1回出向いて講義を行っています。具体的には、日商1級レベルの「商業簿記・会計学」「工業簿記・原価計算」の中から、週1回100分、年間20回を超える講義を毎年実施。これは高いレベルの簿記会計の学習を通して、学習意欲を高めるという狙いがあります。

高校授業グレードアップ型連携実施例<2013年4月15日～2014年1月20日の間に合計23回実施：穂高商業高校>

科　　目	実施内容
商業簿記・会計学 <11回実施>	帳簿記入、試算表・現金預金・貸倒引当金・有価証券・一般商品売買・特殊商品売買①、②・請負工事・リース取引・減価償却計算・自己株式
工業簿記・原価計算 <12回実施>	意思決定会計総論・意思決定のための利益計算方式・業務執行的意思決定会計①～④・構造的意思決定会計①～⑥

◉ 大学授業チャレンジ型連携

穂高商業高校、飯田OIDE長姫高校、辰野高校、丸子修学館高校、松商学園高校の生徒が、夏休み・春休みを利用して、本学において大学のビジネス系の専門科目を受講しながら、教室移動、学生食堂利用等の具体的なキャンパスライフを疑似体験するという内容です。各開講科目60分間で時間割を設定し、時間ごとの教室移動や昼休みの食堂利用については、キャンパスマップを参考にして生徒たちが自分で行動しています。限られた期間ですが大学生気分を味わうことのできる貴重な体験となっています。参加する高校生には、会計学、経営学、マーケティング、経済学、金融論などの専門科目の受講を通して、高校での学びを大学ではどのように展開させていくのかを知り、高校で学んでいることがどんなに大切かに気づいてもらう機会としています。また、地域やまちづくりに関連する講義やディスカッションを通して、自分たちの将来に向けて地域の活性化に関心を持ってもらうきっかけになっています。

また、人間健康学部スポーツ健康学科と岡谷東高校との連携では、同校の健康スポーツコースの1年生および2年生が本学の体育施設を見学し、生涯スポーツや運動指導に関する模擬講義を受け、キャンパスライフを体験する内容で実施しています。

■松商短期大学部チャレンジ型連携実施例<2014春：穂高商業高校106名参加>

	1時限	2時限	3時限	4時限
3月4日	経営分析	銀行論	マーケティング	経済学入門
3月5日	パソコン演習 Excel経営分析	Excel経営分析 パソコン演習	マーケティング	実業高校からの進学・就職を考える
3月6日	銀行論	会計学入門	キャリアクリエイト	閉講式

■観光ホスピタリティ学科チャレンジ型連携実施例<2014春：飯田OIDE長姫高校商業科33名・辰野高校商業科10名>
高校生が地域で活躍するために～高校生が取組むコミュニティ・ビジネスの可能性～

	1時限	2時限	3時限	4時限
3月25日	コミュニティ・ビジネスとは	地域資源とは	高校生とコミュニティ・ビジネス <グループディスカッション>	グループ発表 閉講式

■スポーツ健康学科高大連携事業実施例<2013年度：岡谷東高校>

対　　象	内　　容
1年生	スポーツ健康学科各教員による様々な分野の6講義を実施
2年生	スポーツ健康学科各教員による様々な分野の4講義、および2つの実習を実施
教職履修の本学3年生	授業見学・体育講話・保健室運営参観

◉ 高校活用型連携

本学が連携協定を結んでいる高校においては、総合経営学部、人間健康学部で教職課程を履修している学生の教育実習の受け入れを積極的にしていただいています。また本学スポーツ健康学科と岡谷東高校との連携では、同学科教職課程(保健体育・養護教諭)の2・3・4年生が、高校の体育授業・保健授業や保健室運営を参観する機会も設けられています。これは保健体育教師や養護教諭を目指す学生にとって、実際の教育現場から学ぶ貴重な体験となり、同時に、将来自らが教壇に立つ具体的なイメージを持つ良い機会になっています。

本学の地域との連携についての経験を活かし、高校を支援する「地域との連携支援型事業」

地域との連携は高校にとって重要なテーマですが、地元から生徒が集まる小中学校とは異なり、生徒が広域から集まる高校では、地域との連携がなかなか進みにくい現状があります。そこで、本学の地域との連携についての経験を活かして、高校を支援する「地域との連携支援型事業」に取り組んでいます。

本学が初めて取り組んだ「地域との連携支援型事業」は、平成21年度に実施した小諸商業高校との地元農産物を活用した商品開発です。当時小諸市から協力を要請された地元農産物の活用について、高校生との共同開発を本学の学生が提案した

ことがきっかけで、地元食材を活用するレストラン「停車場ガーデン」の協力を得ながら、特産の雑穀「七穀米」と「山浦ごぼう」を使った「松・小のつながりむすび」を開発し、サークルKサンクスより発売しました。この事業から高校と地域のつながりが生まれ、現在でも高校生が「停車場ガーデン」で期間限定のカフェを開催するなどの成果を上げています。

この取り組みが発端となり、平成22年度には辰野高校と連携し、伊那地方の名物「ローメン」と松本塩尻の名物「山賊焼」を使ったパンを開発して、高速道のパーキングエリアやサークルKサンクスにおいて販売しました。辰野高校とはその後、商品開発やまちづくりの取り組みについて継続的な連携を行なっています。

また、平成24年度には、丸子修学館高校の総合学科福祉コースとの交流から、「教育協力協定」を締結し、高齢者の買い物問題の調査研究や高校生の研究計画に対し

て大学生が助言等を実施。梓川高校では公民館と協力した高校生による地元の現地踏査やワークショップを大学生がコーディネートして行い、それがきっかけとなり高校と地域の交流が活発になっています。

この他穂高商業高校からの依頼で、平成25年度より3学年の文化祭クラス企画に本学学生が高校生と一緒に取り組みました。地域からも好評で来場者が増加したそうです。

「地域との連携支援型事業」においては、**①具体的なテーマや課題を切り口にして実践的な取り組みから始める、②高校生と大学生に加えてそれを支える地域の人々にも参画してもらう、③協定など形にとらわれずに、実践を積み重ねる中で信頼関係を築く**ことを大切にして、より教育的な効果をあげることができるように取り組んでいます。

「地域に愛着を持ち、地域を学び、地域に貢献する」人材育成を支援する「地域人教育」

飯田市と飯田OIDE長姫高校および松本大学が進める「地域人教育」は、飯田地域が抱える地域課題を人材の育成という観点から解決しようという取り組みです。平成23年度に飯田長姫高校（当時）の教員から、「地域を担う人材として高校生を育てるプログラムについて一緒に取り組みたい」という要望があり、その議論の中から「地域人教育」の取り組みが始まりました。「地域人」とは、「地域に愛着を持ち、地域を学び、地域に貢献する」人材を指しています。

リニア中央新幹線開業を見据え、地域のあり方を真剣に模索している飯田市にとっては、若者の地域への定着が大きな課題です。一方、飯田長姫高校にとっては、商業教育を将来のまちづくりや地域経済を支える人材育成として、地域との連携の中で再編成することが課題です。これらの問題意識から、平成23年度を試行期間と位置づけ、高校1年生を対象に本学教員による地域や地元の文化・歴史に関する講義や、買い物弱者問題をテーマにしたリヤカーによる引き売りの研修などを実施しました。その成果を踏まえて、平成24年度に「地域人教育の推進に向けての3者の連携協定」を締結し、より具体的なプログラムの整備を行ないました。1年次から3年次まで大学と飯田市が協力する様々な学習・実践プログラムを配置し、3年間で7単位、245時間を充て、そのうち本学は18時間の講義を担当して実施しています。平成25年度には、総合経営学部より延べ6名の教員が「飯田の産業

飯田市、飯田OIDE長姫高校、本学による「地域人教育」の推進に向けての連携協定締結（H24年度）

史」、「ブランドづくり」などをテーマに講義したほか、飯田市内におけるフィールドワークを本学の教員と学生が指導しました。

本年度からはフィールドワークをより効果的に実施するために、大学生の指導の下松本市内での研修を実施したほか、地域人教育の円滑な実施に向けて高校教員と飯田市職員を対象とした研修会を本学教員を講師に開催するなどの、新たな取り組みに挑戦しています。また、地域人教育の成果を進路に結びつけるために、「チャレンジ型講義」において、地域の課題を解決する「コミュニティ・ビジネス」の講義を行なうなどの取り組みも始まっています。今年度は、はじめて協定締結前の試行期間で1年次から地域人教育を受けた高校生が本学に入学し、7年間一貫教育の一歩を踏み出しています。

将来の地域社会を担う若者を育てつつ、その力を地域に還元して地域自身も元気になる挑戦「デパートサミット」

本学が全面的に協力する「デパートサミット」は、県内の商業を学ぶ高校生が「地域」と「商品開発」、「マーケティング」をコンセプトに学習と実践を行なう取り組みです。これは、今後の商業教育について議論を積み重ねてきた長野県商業教育研究会が主催し、「キャリア教育の推進」「ホンモノ志向の教科『商業』の実践」「ビジネスのスキルとマインドを要請できる学習環境の構築」「各校が持つノウハウの共有化」を目的としつつ、「マーケティング分野の学習の深化」「生徒同士の切磋琢磨」「教員の研修の場」などの意義を実現することを目指してスタートしたものです。本学がこれまで進めてきた高大連携のすべてを集約した取り組みとして位置づけられ、将来の地域社会を担う若者を育てつつ、その力を地域に還元して地域自身も元気になる挑戦でもあります。

具体的には、マーケティングについての理論と実践を学び商品開発を行なう「マーケティング塾」と、その成果を百貨店で発表し検証する「高校生合同販売会（デパートゆにっと）」によって実施されています。

平成25年5月から始まった第一期には、12の高校から約40名の生徒が参加し、本学などを会場に「マーケティング塾」を毎月開講。午前中は主に本学の教員からの「地域資源を活かしたブランドづくり」や「社会的な課題と商品開発のストーリー」、「商品開発と法律」「消費者心理」「商品開発に向けての原価計算」「ビジネスマナー」等の講義、午後はグループディスカッションによる商品開発などへのプログラムを実施しました。

グループワークでは、4地区に分かれ商品開発等に取り組み、商品企画発表会や記者会見を兼ねた商品発表会などを通じて商品を改善。自分たちが開発・セレクトした商品を昨年8月19日から3日間にわたり、ながの東急百貨店での「高校生合同販売会（デパートゆにっと）」で販売しました。

第二期は13の高校から約60名の生徒が参加し、その成果は今年8月18日から3日間開催したながの東急百貨店での「第2回デパートゆにっと」で披露しました。今年の「デパートゆにっと」には新たに木曽青峰高校が木工品を販売したほか、北海道から鳥取まで全国12の商業高校が参加し、全国レベルのイベントとなりました。また、生徒の実行委員会も組織され、より生徒が中心となる運営になりました。

この他、今年2月8日・9日には、自ら開発したバレンタインスィーツを販売するデパートゆにっとアンテナショップ「バレンタインスィーツ～バレンタインまで待てない」が、4つの高校と本学の学生も参加して井上百貨店アイシティ21で開催されました。

高校生が開発した商品は、いずれも地元の伝統野菜や和紙などの特産品を地域の様々な人々の協力を得て商品化したもので、自らの地域の宝を見出し磨くことで、地域への思いが増すとともに、地域と高校生の絆が深まっています。さらに今後、農業高校や工業高校の参加も検討されており、地域の将来を担う若者を育てる重要な取り組みになることが期待されます。

文部科学省著作「大学教育の質的転換に向けた実践ガイドブック」で本学が紹介されました

文部科学省が著作し発行した「大学教育の質的転換に向けた実践ガイドブック」で、本学が紹介されました。これは、文部科学省が平成25年度先導的大学改革推進事業の一環として、株式会社リベルタス・コンサルティングに「大学における特色ある教育事例の把握等に関する調査研究」を委託し、その報告書として出版されたものです。

全国の国公私立大学から42の大学が紹介されており、そのうち私立大学は22校が紹介されています。受験生やその保護者にとっては大学を選ぶ際の参考になり、企業等では大学でどのような教育が行われて、どんな人材を育てようとしているのかなどがわかる内容です。

本学は教育方法の改善に関する取り組みとして、地域づくり考房『ゆめ』の活動が取り上げられています。

文部科学省
地(知)の拠点 大学COC事業

平成25年度文部科学省「地(知)の拠点整備事業」(大学COC事業)の選定を受けての最近の取り組みを紹介します。

第9回食育推進全国大会で学習成果を披露

健康栄養学科 学科長・教授 廣田 直子

6月21日・22日に長野市のエムウェーブで「第9回食育推進全国大会～しあわせ信州 食育フェスタ～」が開催されました。

健康栄養学科3年次の栄養教育実習では、毎年、学外の皆様のご協力のもと、実践的な学習を組み入れていますが、本年度は、この大会を前期授業の成果発表の場にしようと考えました。学生たちは授業のなかで企画を考え、指導案や教材を作成し、プレゼンテーションの練習などをして当日を迎えました。

7区画という広い出展スペースをいただき、食育SATシステムによる栄養診断を行ったり、食生活上の課題について分析して設定した野菜摂取、減塩、朝食摂取、偏食、間食のとり方、適正体重の維持といった内容の栄養教育プログラムを披露しました。にぎやかな会場できちんと声を届けるのは大変でしたが、そうしたことも貴重な学びです。

ブースの一角に七夕飾りと「長野県のご長寿コーナー」も設けました。初日の会場視察で、内閣府政務官と長野県知事、長野市長らが立ち寄られ、短冊や付箋に健康への願いや長寿要因などを記入してくださいました。

会場に設けられたミニステージで「おいでよ♪松大健康タイム～体を動かす&食べる～」も実施し、健康栄養学科の学生たちはほぼぶっつけ本番でしたが、精一杯ステージを盛り上げました。何と言っても圧巻は、スポーツ健康学科の4年生。楽しくわかりやすく、家庭でできる運動の指導を展開しました。両学科の学生たちが学び合えるとても貴重で、よいコラボレーションの機会となりました。

2日目に実施したキッズクッキングには、多くの親子連れが訪れ料理を楽しんでくれました。

後日、栄養教育実習でまとめの作業をしましたが、この取り組みで学んだものは大きかったようです。学生たちの働きかけが、松大ブースに来てくださった方々の健康づくりにつながってほしいと思います。

地域力創出のための『地域産品デザイン講座』(全8回)開講

観光ホスピタリティ学科 教授 山根 宏文

大学があるこの地域では、夏になると近所の農家の人たちがとっても新鮮で、安く、おいしい野菜を路上などで販売しています。しかし、住民は自分の家でも家庭菜園をしているためか、売れ行きは決して良いとは言えないようです。

そこで、地域の人たちが売れない要因は何なのか考え、「消費者の心をとらえる」「商品力を高める」、そしてそれにより「地域力が高まる」ことに期待して「地域産品デザイン講座」を開講しました。

産品をデザインするためには,ただ美しい形や色彩のパッケージをつくるだけでなく、何をつくりたいのか、何を伝えたいのかなど、意図することを伝えたい人に伝えなくてはなりません。そのために、最初にマーケティングやブランドの重要性を理解し、その上で色彩やデザインを学んでいただく内容で全8回の講座を計画しました。

講師はネット通販日本一の楽天市場や無印良品などで実践を積まれた方にお願いし、わかり易く実践的な講義をしていただいています。さらに、短期大学部の金子能呼准教授による、「色彩について学ぶ講座」も設けています。

受講登録者は第一回目から徐々に増えており、現在は53名で、みなさん非常に熱心です。地域の農家の方々が愛情込めてつくられたものが、良く売れ、消費者に喜ばれるようになるために、その手法と実践を学んでいただきたいと思います。そして、心豊かに暮らしてもらえることが日々お世話になっている地域への恩返しであり、この講座の最終目標でもあります。

開催日	講　師	タイトル
第1回 6月27日	倉澤 聡 氏	デザインマネジメント「広い視野からデザインを考える」
第2回 7月2日	米山 聡 氏	デザインとマーケティング「マーケティングと商品デザインの大切な関係を考える」
第3回 8月25日	米山 聡 氏	地域ブランドの概念と可能性「地域ブランドづくりのための重要な取り組みを学ぶ」
第4回 9月5日	庵　豊 氏	共感を得られる商品とは「地域産品・地域ブランドづくりのために大切なこと」
第5回 10月23日	米山 聡 氏	地域産品デザインの現状分析「人気のある(消費者の心をとらえている)地域産品の要因」
第6回 11月28日	金子 能呼、倉澤 聡 氏	デザインの表現方法「好感力の得られる色・デザインとは」
第7回 12月12日	倉澤 聡 氏、米山 聡 氏	ワークショップ「地域産品デザインの可能性を創出」「地域産品の企画・販売増のためのワークショップ」
第8回 1月23日	山根 宏文、倉澤 聡 氏、米山 聡 氏	地域産品デザインに対する発表会

※ご希望の講義のみの受講も可能です。ご希望の方はCOC事務局(TEL0263-48-7200)へご連絡ください。

「買い物弱者問題」をテーマに、理論学習と実践活動を組み合わせた学びを開始

観光ホスピタリティ学科 教授 白戸 洋

高齢化の進展と小規模商店の衰退を背景として、高齢者が歩いて買い物ができない「買い物弱者」問題が深刻化しています。本学ではこの問題に、観光ホスピタリティ学科白戸ゼミが、2009年度から研究テーマとして取り組んできました。

たまたま畑に捨てられていた完熟トマトを見つけた学生の発案から、規格外の野菜を販売する「もったいないプロジェクト」として2010年から始まった行商は、地域の高齢者の生活ニーズを充たす重要な事業に発展してきました。郊外型の大規模ショッピングセンターが次々と増えていく一方で、近所の小さな商店や商店街は衰退し、車や自転車を運転できない高齢者は生活に欠かせない食料品の入手が困難になってきている実態がそこにはありました。学生による実習に終わらせないために、2012・2013年度には、松本市内約230名を対象に買い物実態調査及び栄養・食生活調査を実施し、買い物ニーズの把握とその対策の検討を行ないました。

その結果、買い物のニーズは多様であり、単に生活に必要な食料品を買うことにとどまらず、買い物を楽しんだり、人とのコミュニケーションの場としても大切であることが分かりました。そこで、地域で人と人とが交流する場として、「コミュニティ・カフェ上土日和」を中心街の上土商店街で定期的に開き、単なる買い物だけでなく多様なニーズを受け止める商業のあり方を実証的に研究しています。さらにカフェと行商を組み合わせた「コミュニティ・カフェ駅西日和」を駅周辺で開催し、まちづくりにも取り組んでいます。また、飯田OIDE長姫高校や丸子修学館高校の生徒を受入れ、行商の実習を行い、高校生による地元での取り組みも支援しています。

今年度からは、文部科学省「知(地)の拠点整備事業」に位置づけ、全学生を対象とした課題解決型講義「地域課題研究」を新たに開講し、「買い物弱者問題」をテーマに理論学習と実践活動を組み合わせた学びを行い、今後4年間かけて、企業と連携しつつ事業化を目指しています。今後は、行商のような訪問型事業に加えて、買い物弱者を対象とした食料品の販売やカフェ

などによる小規模店舗を開設するなど、新たな実証実験に取り組む予定です。

学生ボランティア参加 本学を会場に「松本市総合防災訓練」開催

防災委員長・総合経営学科 准教授 矢﨑 久

防災の日、牛伏寺断層帯を震源とした大地震発生との想定で第35回松本市総合防災訓練が本学を会場に関係者約300名の参加を得て開催されました。

災害現地対策本部が設営された多目的グラウンドでは瓦礫に挟まれ身動きがとれない被災者役に扮した本学学生ボランティアおよび地域住民の救助活動と寸断されたライフラインの復旧、第一体育館では家屋倒壊により避難してきた近隣住民の避難所設営と安否情報確認、さらに正面ロータリー周辺では炊き出し訓練がおこなわれました。

大地震、津波、豪雨、土石流、そして豪雪など、わが国を次々と襲う災害。決して他人ごとでは済まされない状況に、訓練に参加した50名を超す本学学生ボランティアの表情も真剣そのものでした。

11月には「防災士」の養成講座が県内大学では初の取り組みとして本学で開催されます。本訓練は、地域防災教育に果たす本学の役割を具現化する一歩となったのではないかと思われました。

※防災士養成講座については次ページをご覧ください。

僕も、わたしも、できます! 中学生対象の心肺蘇生講習

健康安全センター 保健師 脇本 澄子

本学の卒業生が保健体育の授業を受け持つ、信州大学教育学部附属松本中学校の2年生を対象に、心肺蘇生講習を行いました。当日は、教員を目指すスポーツ健康学科の学生がサポートについてくれました。

DVDで心肺蘇生の実際を視聴してもらった後、講習キットを使って実習をしていきます。AEDの使いやすさに感心する一方、心臓マッサージの大変さに驚いた生徒も多かったようです。「胸骨を押しているときは、私がその人の心臓になるので、軽い気持ちでやれるものではないんだ」とその大切さを実感してくれました。また、「自分の命、みんなの命を大切にしなければならないと強く感じました」「倒れたのが知らない人でも、僕できます!と声をかけられる人になりたい」といった感想もありました。

一人ひとりが勇気を出して命を守れる社会になるように、講習を続けていきたいと思います。

文部科学省「地(知)の拠点整備事業」(大学COC事業)として、下記の講座を開講します。ぜひご参加ください。

三がく(学・楽・岳)都の“ひとづくり”・“まちづくり”・“健康づくり”をテーマに公開講座開講

本学で日々取り組んでいる“ひとづくり”“まちづくり”“健康づくり”の3つのテーマで全4ターム、計10講座による公開講座を、下記の通り開講します。事前のお申し込みは不要、入場無料ですので、お気軽にご参加ください。

■第1ターム　防災の“まちづくり”

	開催日	時間	講師	テーマ
第1講	9月27日㈯	13:30～15:30	関澤　愛氏(東京理科大学大学院教授)	そのとき地域にいる誰もが参加する防災のまち
第2講	10月10日㈮	18:00～20:00	尻無浜　博幸(松本大学教授、松本大学東日本大震災災害支援プロジェクト代表)	災害とボランティア活動 ―東日本大震災被災地を手がかりに―

■第2ターム　スポーツを通じたこどもの“からだ・こころそだて”

	開催日	時間	講師	テーマ
第1講	10月26日㈰	10:30～12:30	中島 節子(松本大学専任講師)	こどもの健康
第2講	10月26日㈰	13:30～15:30	矢﨑　久(松本大学准教授) 齊藤　茂(松本大学専任講師)	こどもの“こころそだて”
第3講	11月　2日㈰	13:30～15:30	岩間 英明(松本大学准教授)	こどもの体力低下、何が問題か?

■第3ターム　おもてなしの“ひとづくり”と“まちづくり”　第1講～第3講　(11月上旬から中旬開催予定)

■第4ターム　地域ビジネスと“「ひと」・「まち」づくり”　第1講・第2講　(11月下旬から12月上旬開催予定)

※第3ターム、第4タームの詳しい内容につきましては、信濃毎日新聞紙上や本学ホームページでご案内します。

【 会場 】　本学514教室(5号館)

北信越地域の大学で唯一の認定校
松本大学「防災士養成研修講座」開講

減災と社会の防災力向上の役割を担う「防災士養成講座(NPO防災士機構認定)」を松本大学主催で開講します。

この講座は2日間のライブ講義12科目及び個人学習レポートの合計31科目で構成され、2日目の講義後に検定試験が行われます。講師陣は本学の教員、信濃毎日新聞論説副主幹、元宮城県副知事、松本市危機管理課、名古屋大学減災連携研究センター、信州大学山岳科学研究所、耐震診断の専門家など防災の最前線で活躍中の9名が担当します。

現在防災士は全国で8万名が登録(長野県では千名超)され、行政、消防、企業や地域で活動しています。

本学で行う講座は学生、教職員に加えて市の職員や企業人など多様な参加者が地域防災について共に学ぶ機会となります。本学学生と松商学園教職員には受講料の一部が割引となります。また防災士認定には必須の普通救命講習が10月下旬に学内で実施されます(松本広域消防局主催)。

【 防災士になるための必要な条件 】

①大学等の認定研修機関で研修を修了すること
②普通救命講習を修了すること
③防災士資格試験に合格すること
※本学では①の研修を2日間実施し、2日目の講義後に③の資格試験を行います。
※②は別途受講が必要です

【 研修講座の内容 】

自宅学習および会場研修

今年度本学での会場研修および資格試験
日程／11月15日㈯・16日㈰
申込締切：10月17日㈮
受講費用：30,000円
(※本学学生、教職員は割引あり)

申込要領など詳しくはホームページまたは、お電話でお問い合わせください。

子どもからシニアまでが真面目に学び、楽しく過ごす“みんなの大学”
『みんなのカレッジ』開講

昨年11月に実施して好評だったシニア世代を対象とした「まつもとシニアカレッジ」を、今年は対象を子どもからシニア世代までに拡大して、「みんなのカレッジ」として開催します。内容は、将来なりたい職業に触れたり、子育ての悩みを解消したり、趣味を深く掘り下げたり、シニアの抱える不安に応えたり……と、地域に暮らす全ての人が、一緒に楽しんだり、真面目に学ぶ様々な講座や体験イベントで構成されています。

本学も文部科学省の「地(知)の拠点整備事業」の一環で、実行委員会の構成団体として参加しており、健康づくりや地域交流などの分野の多数の講座を、本学の教員が担当します。

詳細については市民タイムス紙上やabn長野朝日放送で告知されますので、ご確認ください。

【開催日】／11月15日㈯・16日㈰　【会場】／本学

総務省が実施する「地域の担い手創造事業」の全国モデル実証事業に、「松本大学地域づくりコーディネーター養成講座」が採択

地域づくり考房『ゆめ』専任講師　福島 明美

総務省が実施する「地域の担い手創造事業」は、少子高齢化や人口減少の影響に伴い、地域における諸活動を担う人材の不足が懸念されている中、地域の担い手となる人材を確保し、その育成に努めていくことを目的としています。具体的には、地域の担い手育成の全国的な展開の参考となる先進的な取り組み等をモデル事業として採択し、そのノウハウを全国に広めていく体制の構築を図り、継続的に全国に伝え実施していく上での課題・解決方策の抽出、検証等を行うものです。初年度の平成26年度は、全国から18団体が応募し、全国モデル実証事業として3事業が採択され、その一つとして本学で実施している「松本大学地域づくりコーディネーター養成講座」が選ばれました。

「松本大学地域づくりコーディネーター養成講座」は、2009年から考房『ゆめ』が主管となり開講してきました。地域の問題・課題解決のために、「連携」「協働」を視点に地域の資源（ヒト・モノ・コト・カネ）を掘り起こし、つなぎ創造していく役割を担う「地域づくりコーディネーター」を養成しています。認定者は、各自が抱える地域の課題解決に向け培ったコーディネーション力を発揮し、様々な機関と連携し地域活動の要として活躍しています。また、本学学生との協働企画も生まれ、次代を担う若者の人材育成に大きく貢献しています。

今年度は、この「地域の担い手創造事業」を活用して、合宿やフィールドワークを取り入れさらに内容を充実させて展開していく計画で、10月に受講者を募集し、11月から講座を開講します。全国からの受講生を募り研修を実施することで、異業種・異分野・異年齢に加えて、全国各地での取り組みの実態を知る機会となり、ネットワークを広げグローバルな視点で物事をとらえ、コーディネーション力を発揮できる地域のリーダー育成が可能になります。こうして、地域の担い手となる人材を創出し、地域の活性化に向けた動きが活発になるとともに、このノウハウが全国に広がることが期待できます。

6次産業推進事業における松本大学の取り組み2014

健康栄養学科 専任講師　矢内 和博

本学が安曇野市商工会をはじめ生産者、調理師会などと結成した「中信地区6次産業推進協議会」は、農林水産省6次産業化対策事業補助金の指定を今年度も受け、この活動も早4年目を迎え、広く評価されるようになりました。

昨年11月13日に発売となった信州アルクマそばは当初の売り上げ目標の3万食を大幅に超え、現在約17万食以上の売り上げとなっており、この取り組みは6次産業の成功事例として、農林水産省の本所に展示されています。

本年は、アルクマそばの原料として当研究室で開発した「焙煎そば粉EX」の商標取得と量産体制の確立、衛生管理の向上、さらには雇用の確保を可能にする新規製造工場の立ち上げを行う計画です。また、信州産そば粉の原材料確保を目的に、学生の教育のためにと快く貸していただいた遊休農地を学生と一緒に耕し、種を蒔く作業を行いました。

農園には多くの農産物があるのと同時に、売れないもの、食べられるが廃棄するものなどが多くあります。これらを何ともできない事情もありますが、ここに価値を見出し、世の中のニーズに合わせたモノづくりを地域、異業種が一体となって行っていくことが、6次産業の醍醐味だと思います。学生の教育の場としてはこれ以上ない環境の中で、地域に貢献できる大きな成果が出せるように今後も活動していきたいと考えます。

アルクマそば第二弾も間もなく発売しますので、ご期待ください。

平成26年度外部資金獲得事業

研究課題名・事業名	応募先	研究代表者・責任者
キャリア形成訪問指導事業	長野県	尻無浜　博幸
ひらめき・ときめきサイエンス「自分の遺伝子型を調べてみよう～2014～」	独立行政法人 日本学術振興会	山田　一哉
長野県松本市ならびにその周辺地域で販売された大豆製品への遺伝子組換えダイズの混入状況調査	公益財団法人飯島藤十郎記念食品科学振興財団	沖嶋　直子
食物アレルギーの子どもが、安全で楽しい食生活を送れるように －保護者の負担にならないアレルゲン除去・代替食考案と調理時のアレルゲン混入の要因分析について－	公益財団法人 森永奉仕会	沖嶋　直子
時計遺伝子と長寿遺伝子の発現相関は、糖代謝調節に関わるか?	一般財団法人 長野県科学振興会	浅野　公介
ZHX1変異遺伝子の生物学的役割の解析	一般財団法人 長野県科学振興会	羽石　歩美
高校サッカー選手の食生活等実態及び母親の働き方と健康に関する調査	一般財団法人 長野県科学振興会	大森　恵美
生活が持つ人間形成力の解明 －近代日本の「家庭教育」論及び日記・自叙伝に着目して－	一般社団法人　前川財団	藤枝　充子

応急手当普及啓発活動で表彰

このたび本学の応急手当の普及啓発活動が優良と認められ、松本広域消防局より表彰されました。これは日頃から行っている、「心肺蘇生講習会」などの開催が評価されたものです。

キャンパスを飛び出し地域で学ぶ！

アウトキャンパス・スタディ

out campus study

「そば→花豆→健康長生きスポット＝奈川」の魅力

観光ホスピタリティ学科
教授 尻無浜　博幸

松本市奈川（合併前は南安曇郡奈川村）は不思議なところです。平成25年10月1日現在の奈川地区高齢化率は42.0%に対して、介護保険制度における要介護認定率は12.0%です（松本市35地区平均:高齢化率25.1%、要介護認定率18.0%）。合併後最初の記録が残る平成17年4月時点（9年前）では高齢化率33.5%に対して、要介護認定率は14.1%でした。一般的に、高齢化率の上昇とともに要介護認定率は上がっていくものです。しかし、奈川は逆に下がっています。しかも要介護認定率数値は松原地区に次いで2番目の低さです。そんな地区が松本大学から40分のところ、標高800mのところにあります。

▲健康長生きスポット：奈川の風景
標高が高いので野菜の出荷時期がズレる利点、里ではできない野菜や豆類も豊富にできます。

5年前に障がい者就労の観点で良質な奈川のそばを用いた工賃アップに取り組んだことがあり、その後トウモロコシや花豆を作り、今では農地を借り、作付けから収穫、販売を目指す開発までに取り組んでいます。従って、今回ご紹介するアウトキャンパスは、どこかの工場視察や○○教室の取り組みなどと異なり、地区まるごとキャンパスに仕立てての学びであり、時間的ラグと取り組みの幅で分かりづらいかもしれません。

今年度は、「地域の協調性、結束力が生活に影響を与えている」という仮説をたて、さらに、それをどうやって検証していくか?という具体的目標を掲げ、奈川振興公社、奈川観光協会、奈川地区福祉ひろばなどの機関と連携して、人間関係によって知らず知らずのうちに自分の行動が決まることの検証を、奈川の地で、花豆を作りながら検証しているのです。学生の積極的な関わりが奈川でも喜ばれています。

▲▶地区内は高齢化が進み遊休地が多いですが、余った農地と道具、農業を指導して下さる地元の住民という3拍子の資源はそろっています。労働力が少し足りないので、それを補う仕組みづくりが必要です。

イチゴの収穫体験と商品開発

健康栄養学科
専任講師 矢内　和博

食品の官能評価鑑別法の授業では、毎年地場産農産物を知ることを目的にアウトキャンパス・スタディを実施しています。今年は安曇野市明科でイチゴ収穫体験を行いました。

イチゴの収穫はほとんどの学生が体験しているようでしたが、普段食べているイチゴが1年のサイクルの中でどのように栽培されているか?ほとんどがハウス栽培されている背景、さらには歴史などについて学ぶ目的で実施しました。

訪問したイチゴ農家を営む市川さんは、一人で8000株ものイチゴを栽培しています。イチゴはバラ科の植物で、収穫後期になると株から子孫となるルートという子株ができ、それを新しい苗として継代する栽培法を取ります。また、結実する植物の多くは花が咲いて実になるプロセスを経ますが、いくつかの植物体内にもともとは存在しない花になる部分ができるメカニズムがあり、イチゴの場合は株を一定期間低温に晒すことで花の元になる花芽ができます。これを抽苔（ちゅうだい）といいます。お米の場合は日照時間（昼と夜の時間の長さ）の変化が刺激となって抽苔が起こります。イチゴの高需要期は冬から春なので、そこに照準を合わせるためには9月くらいから栽培を開始します。しかし、寒くない9月では抽苔しない為、苗を夏の時期に標高の高い山に持っていったり、冷蔵庫に入れるなどの処理をします。栽培が始まると日に日に寒くなって暖房が必要になり、原油価格の高騰はイチゴ農家の経営を圧迫しますが、それを価格に反映させることは難しいのです。このように苦労の多いイチゴ栽培ですが、市川さんのイチゴは地元のファーマーズマーケットでは県外産イチゴを押しのけ、あっという間に売り切れるそうです。

ある食品会社の社長さんから管理栄養士として欲しい人材の話を伺いました。目の前にある食材をいかに美味しい料理に仕立てられるか、開発前に頭の中で完成図が想像できるか、そこに栄養バランスを付加する工夫ができるか、衛生的にモノづくりができるかという事でした。そういう人材を輩出したいと強く思います。

収穫体験の後の商品開発は多種多様で、毎年の楽しみです。

イチゴを使った商品開発実習

イチゴのちらし寿司

イチゴソースのハンバーグ

話と和と輪、想像と創造の空間

地域づくり考房『ゆめ』

地域づくり考房『ゆめ』専任講師
福島　明美

地域づくり考房『ゆめ』は、地域人としての自覚や人間性を養う学びの場であり、活動実践を通して自立した人づくりをめざしています。学生と地域をつなぎ、地域を〝共育〟の場として、学生・地域それぞれの立場でともに地域づくりを考える人材を育成しています。学生は、大学で学んだ知識や技術を地域づくりの中で実践的に活かしていきます。

考房『ゆめ』OGと元保育士の経験値から実践力を学ぶ

「キッズトレイン」企画・運行

上高地線の電車を貸し切り、親子・親同士の交流の場づくりを通して、多くの方に上高地線に愛着を持っていただこうと、9月7日に考房『ゆめ』主催で特別列車を運行しました。当日はアルピコ交通“なぎさトレイン”の車内が小さなこども達のあそび場に大変身！ 6歳以下のこどもとその保護者30組100人の参加者と23人のスタッフの総勢123名が乗車し、北新・松本大学前を10:02に出発。松本駅を経由して新島々駅までの約1時間、電車内で多彩な催しが繰り広げられました。

車内は、カーペットを敷き、手作り装飾で暖かな空間を演出。手遊び・乗車ルールを楽しく伝える大型紙芝居・親子ふれあい歌体操などの全体会を実施。さらに親子で楽しむスタンプラリー（魚つり・輪投げ等）と段ボールトンネルや、曲にあわせて手作りマラカスで踊ろう、立見台で運転席や車窓見学、絵本コーナーの他、くつろぎ・飲食・授乳・おむつ交換コーナーなども設けました。新島々駅では、「ゆめトレイン」ヘッドマークやなぎさちゃんパネルと一緒に記念撮影を行い、帰路はフリー切符で各家族きままな電車旅を楽しんでいただきました。

この企画は、学生時代に考房『ゆめ』を拠点に、上高地線にかかわる地域活動をしてきた卒業生の発案です。相談を受け、学生にも地域にも有益と考え、考房『ゆめ』の事業としてプランニング。5月に学生や一般に向けスタッフを募集し、学生有志8名とママさん5名でプロジェクトを立ち上げ、準備を進めました。当日は学生プロジェクト「松本大学こどもあそび隊」も協力。集まったママさんスタッフは、学生時代地域活動に関わった本学卒業生と元保育士。その経験値と母親目線の細部に渡った心配りや楽しむ気持ちが学生のアイディア等と融合し、楽しい企画が生まれました。また、この活動を通して学生は、「前に踏み出す力」「考え抜く力」「チームで働く力」といった社会人基礎力を身につけていきました。

本企画には、アルピコ交通はじめ多くの企業からの協力と協賛をいただきました。御礼申し上げます。また、今回60組の応募があり、乗車できなかった方に向け、11月8日の松本市主催モビリティマネージメント事業に併せて第2弾を運行します。

企業マンの実践力と学生のアイディアが響き合い多彩な催しに

「平成26年度すすき川花火大会」企画・運営

松本市すすき川河川敷で行われる「すすき川花火大会」に、「若者の視点と発想で、新風を吹き込みたい」と、2月に実行委員会事務局である富士電機から協力依頼がありました。そこで、学生参加のプログラムを作成し5月に学生を募集したところ、全学部の学生16名の参加希望がありました。

学生は、近隣町会や関係機関、富士電機でつくる実行委員会に参加するほか、各々が選択した企画運営、広報、山雅・商店街コラボ企画などの担当に分かれ富士電機の社員さんとチームを組み、考えたアイディアを取り入れた内容を深めていきました。

具体的には、花火のデザインやオープニングの演出を若者目線でプロデュースしたり、新たに保育園児の絵を基にデザインした特性花火の打ち上げや写真・絵画コンテスト、松本山雅FCや松本商店街組合との協働による「抽選会」を企画して実施しました。また、ポスター、チラシや協賛・協力団体に配布するうちわは、見やすく、目を引くデザインに心がけて作成。この他に、多くの方の来場を図るために、FMまつもとにて生番組で参加を呼び掛けました。

学生は約2カ月といった短期間でしたが意欲的に取り組み、富士電機社員の方や学生同士のチームワークで新たな趣向が生み出され、花火大会を盛り上げることができました。

花火大会は8月10日に実施予定でしたが、あいにくの悪天候で11日の実施となりました。当日は、企画運営してきた学生へのサプライズとして大学からの花火打ち上げもありました。

参画した学生は、「すすき川花火が松本に根付くようにとの思いで活動しました」「自分の意見を伝える大切さを学びました」「たくさんのアイディアをぶつけられるのが楽しい。企業の方は、たくさんの視点から物事を見ているので日々勉強でした」「社会人の企画・運営力やチームワーク力などを間近でみることができ、勉強になりました」と多くを学び、大きなやりがいと達成感を味わいました。

地域の健康づくりを支援する

地域健康支援ステーション

地域健康支援ステーションでは、地域からの依頼を受けて健康づくりの支援やメニュー提案など実践的な活動を行っています。最近の活動を紹介します。

管理栄養士スタッフ 飯澤　裕美
健康運動指導士スタッフ 赤津　恵子

松本山雅スタめしコラボ企画進行中

「松本山雅FC」との共同企画により、本学健康栄養学科学生有志が、スタジアム「アルウィン」での試合時に来場者に販売する飲食物（通称:スタめし）の新商品開発を行っています。この活動も5回目を迎えますが、今回は学生がアイディアを提案し、飲食業者さんと、打ち合わせを重ねて商品に仕上げていくという方法で行っています。

「売れる商品づくり」という視点から、お客様のニーズを想定し、おいしさはもちろん、商品の彩りや価格設定、販売方法などをトータルで考え、試行錯誤する過程は、管理栄養士をめざす学生にとって貴重な学びが得られる場となっています。業者の皆様には忙しい中、ご支援いただきまして、この場をお借りして感謝申し上げます。

今年の新商品は7種類。9月14日の販売初日は、おかげさまで完売いたしました。

林業従事者の研修会で、健康管理講習を行いました

森林を守る、林業の担い手を育成する研修会の講座の中で、管理栄養士スタッフが健康管理の講義を担当しました。「現場の仕事は体が資本、安全な仕事をするために自分の体もメンテナンスしよう」と食事チェックやクイズなどを交えながら健康づくりの観点から、偏らない食生活の実践に向けた具体的な方策を考えていただきました。

まず自分の食べ方の癖に気づくことから興味を持ってもらいます。働き盛りの男性ですが、前日の食事バランスのチェックをしてみると主食が極端に多い人、少ない人、肉や魚の料理をたくさん食べた人、少ない人など、皆まちまちに偏りのある食べ方をしていました。

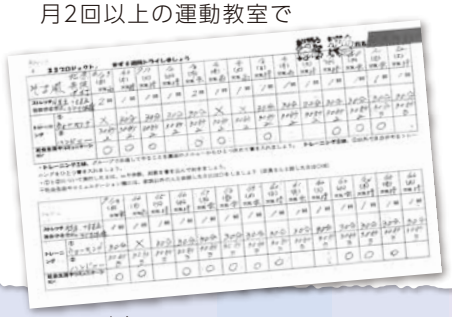
晩酌のアルコール飲料のクイズや、バランスよい弁当の話など、すぐにも使えるお話をしましたので、講義終了後は昼食を食べながら「野菜少ないなあ」などと話す姿も見られました。

楽しく効果的に継続できる、定期的な運動教室

当ステーションに近隣の複数の公民館から「定期的な集いの中で体力づくりの運動をしたい」との依頼があり、毎週又は毎月定期的に伺っています。こうした定期的な運動教室では、楽しく効果的に継続できるよういろいろな工夫を取り入れるようにしています。

4月から8月までに、別表のとおり、健康づくりのお手伝いをさせていただきました。いずれもウォーミングアップを兼ねた軽運動を伴うチーム対抗戦によるレクリエーションを取り入れ、笑いのある運動教室にするようにしています。また、マンネリ化しないように、椅子を使ったり、寝転んで行ったり、脚部、足部、体幹など筋トレ部位を変えてトレーニングを行うようメニューを工夫しています。

月2回以上の運動教室では、初めての参加者に簡単な体力測定と体組成測定を実施し、各人の鍛える部位を明確にしたうえで、静岡県の「ふじ33プロジェクト」を参考に3人のチームで3か月、ストレッチ+筋トレ+社会的コミュニケーションの3種類を実践中です。1日中前かがみで生活している私たちにとって、ストレッチは意識しないとなかなかできないため、家庭では簡単な「背伸び」を推奨しています。筋トレは3人で共通して行う種目一つと、他に体力測定の結果をみて、個別に行う種目一つを実施しますが、いずれも家事をしながらできる「片足立ち」や「スクワット」など簡単な運動からそれぞれに合わせて選択します。各人が家で毎日実践した運動等を日記表に記入していただき、2週間ごとに持ち寄ってチームで励まし合い情報交換などをしてモチベーションを高めるようにしています。社会的コミュニケーションは認知症予防につながるため、記録をもとに積極的に取り組めるようにしました。



A公民館で学生といっしょに

B公民館チーム長期対抗レク

定期的な運動教室には、学生も参加し、見学したり指導したりと学びの場となっています。参加者のみなさんから、「来るのが楽しみ」、「最近娘からむくみがとれたと言われた」「朝起きるのがつらくない」などと、うれしい感想を頂いております。

【別表】定期的に伺っている運動教室

実施状況	4月	5月	6月	7月	8月
A、B、C公民館での実施回数の計	4回	9回	12回	10回	8回
参加者延べ人数	39人	113人	160人	126人	93人

News & Topics

シンガポールの観光系専門学校生との文化交流会

シンガポールから観光を専攻している専門学校生24名が6月27日に来学し、総合経営学部所属の学生と英語による文化交流を行いました。本件は、外務省の青少年交流事業「JENESYS2.0」の一環で、長野県観光協会からの依頼を受けて計画した交流会です。

交流会当日は、シンガポールの民謡や日本のロックダンスで歓迎した後、伝統芸能、産業、スポーツ、学生生活などテーマ毎に8グループに分かれて自国の文化の特徴をお互いに話し合い、最期にはその場で完成したポスターを提示して、其々の共通点、課題などを発表しました。言葉で上手く伝わらない場合には、絵を描いたり、スマートフォンで検索して写真を見せたりするなど、和気あいあいとした雰囲気の中、実り多い交流会となりました。

(観光ホスピタリティ学科 教授　益山 代利子)

H26年度 オーストラリア国立ニューカッスル大学短期語学研修

8月11日から25日にかけて『オーストラリア国立ニューカッスル大学短期語学研修』が実施され、本年度は3名の学生が参加しました。平日の研修としては、午前中は大学内での英語研修、午後は様々なアクティビティーを通してのオーストラリア文化体験という日程でした。アクティビティーは、Blackbutt自然公園でコアラと触れ合ったり、船の上でのDolphin watchingと砂丘をサンドボードで滑り降りたり、ブーメランへのオリジナルデザインのペイントや、中学校訪問などの充実したプログラムでした。

また、ホームステイ先でホストファミリーと過ごす時間も英語は勿論、文化を知る上でも重要な学びでした。

研修最終日には修了証書の授与が行われ、各々が達成感と自分自身の成長に手ごたえを感じている様子でした。

(大学院健康科学研究科 准教授　呉 泰雄)

新村に咲くひまわりが地域を元気に!

今年も8月に大学の農地に13万本、9月に新村の交差点の農地で30万本のひまわりが咲き誇り、ニュースやネットへの投稿で話題になっています。本学が位置するこの地区は、松本と上高地や飛騨高山をつなぐ観光道路にも関わらず、際立つ資源がなく通過点となっていました。5年間花を咲かせ続けたことで認知度が高まり、学生の実践教育としての「資源性」も備えた、気分の明るくなる壮大なお花畑となりました。黄色は元気を引き出すカラー。地域の元気は住民の元気、今後の展開が楽しみです。

(観光ホスピタリティ学科 准教授 中澤 朋代)

「ひらめき☆ときめきサイエンス」を開催

去る9月6日に第7回目となる「ひらめき☆ときめきサイエンス」実験教室を開催し、高校生11名の参加がありました。参加者の唾液から DNA を調製して、「お酒に強いか、弱いか」「太りやすいか」「短距離型筋肉か長距離型筋肉か」に関わる遺伝子を一つ選んで DNA 型をタイピングするという内容でした。情報関連企業が続々と遺伝子型解析事業を開始したこともあってか、高校生も今まで以上に深い関心を寄せていました。実験で、自分の DNA を目に見える形で沈殿させたときには大いに盛り上がり、自分の遺伝子型が明らかになったときも互いに一喜一憂していました。ティーチングアシスタントの学生達も先輩として適切に指導でき、高校生の良き相談相手になっていました。採択されれば次年度以降も続けていきたい取り組みです。

(大学院健康科学研究科　教授 山田 一哉)

初の『通常授業公開』実施

本学への理解をより深めていただくための初の試みとして、高校生や保護者、高校教員の方を対象とした通常授業公開を、7月21日に実施しました。当日は大学・短大の全学部・学科の約40の授業を公開し、各教室後部に参加者用の座席を設け、関心のある授業を自由に入退室して参観できるようにしました。

全参加者数は77名(内保護者2名、教員1名)で、多くが県内からでしたが、山梨県からの参加もあり、そのうち2個以上の授業を受けた高校生が50名、4個以上も14名と関心の高さがうかがわれました。また、今後の進路選択に役立ったというアンケートの回答が87%(役に立たなかったという回答は0)で、高校の教員からも大学の授業の雰囲気を体感できる高校生にとっては有意義な機会であると好評でした。

今年度2回目の授業公開を10月13日の体育の日に開催しますので、ぜひ多くの方に参加していただきたいと思います。

(入試広報室長　中村 文重)

2014松本広域ものづくりフェア開催

本学を会場に「第15回松本広域ものづくりフェア」が7月26日、27日の2日間開催され、12,804名の来場者が体験コーナーや展示を楽しみました。

体験教室の種類や参加人数は毎年着実に増えており、第11回には20種類2,016名の参加でしたが、今回は31種類2,500名の参加がありました。本学も総合経営学科教員と学生による「おやこ防災教室」や、健康栄養学科の教員による「マイ・ドレッシング、マイ・スポーツドリンク作り体験」の新メニューを加えました。この他に毎年好評の「キッズプログラミング教室」や、産学連携コーナーでの「オリジナル名刺作成」、「高大連携によるものづくりポスター展示」を行いました。

また、スポーツ健康学科田邉ゼミが効果検証実験を行った電動アシスト四輪自転車「けんきゃくん」試乗コーナーには、子供から大人まで順番待ちの列ができ、賑わいを見せていました。　(管理課長　臼井 健司)

部活動情報 Club・Circle

女子ソフトボール部　インカレ出場

強豪校を相手に がっぷり四つに組むも惜敗

女子ソフトボール部にとって創部以来9年連続の出場となる全日本大学ソフトボール選手権大会が、8月29日から9月1日を会期として山形県花巻市で開催されました。

本学は初戦、近畿地区から勝ち上がってきた立命館大学と対戦しました。立命館大学は高校時代実績のある部員が多く、強豪ひしめく関西リーグにあって常に上位争いをしている力のある大学ですが、勝機は十分あると考えていました。

先発は山下ひかり、公式戦の出場は少ないものの1年生ながら安定感のあるピッチングをしていたことと、関西リーグの各校はデータ収集に力を入れていることから意表を突く意図もありました。山下は期待に応え5回までは相手打線を押さえ、山下のボールに慣れてきた6回からは満を持してエース山越栞奈を起用しました。山越は安打とバッテリーエラーにより2点を先制されてしまいましたが、その裏、先頭の1番水澤陽香が右中間に特大の本塁打を放ち嫌なムードを断ち切ると、小磯利沙の安打と北川原芽生の四球で相手を攻め立てました。

しかし、同点を狙ったエンドランが不運にも投手正面のゴロとなり失敗、川勝和の右中間を抜けたと思われた打球も相手右翼手の超美技に阻まれ、結局1点を返すに留まりました。1点差の最終回、山越に代えて杉山恭香が登板しましたが、安打とエラーにより2点を追加され、3点差で最後の攻撃を迎えました。最終回、代打の駒田美優、曽根原葉月、水澤の安打で1点を返す粘りを見せましたが、反撃もそこまで2−4で1回戦敗退となりました。

強豪校を相手にがっぷり四つに組んだ試合ができたこと、下級生の活躍がめざましかったことなど収穫もありました。多くの皆様にご支援賜りましたことに感謝すると共に、さらなるチーム力の向上を目指し、部員全員で努力を重ねていきたいと思います。

（女子ソフトボール部　監督　岩間 英明）

ラート部　インカレ出場

最多選手数で出場し 大学間の交流をはかりながら健闘

8月23日・24日つくば市桜総合体育館において「第10回全日本学生ラート競技選手権大会」が開催されました。前日から会場入りしていた本学選手団は、1年新入部員7名を加えて総勢17名という最多選手数での出場となりました。

初代インカレ実行委員長（筑波大学OB）の、「スポーツを通じて大学間の交流を楽しんでください。」との大会趣旨宣言に続いて、初日は予選が行われました。翌24日は、本学から男子3名、女子4名が決勝進出を果たし、それぞれの自由演技で競技に挑みました。終了後のデモンストレーションでは、緊張から解放され、手拍子の弾む館内でのパフォーマンスを全員が楽しんでいました。

（ラート部競技部 顧問　犬飼 己紀子）

【大会成績】

- **大学対抗団体　第2位**
  松本大学　Aチーム
- **男子個人総合　第2位**
  林　佑季　スポーツ健康学科4年
- **女子個人総合　第3位**
  月岡美穂　スポーツ健康学科2年
- **女子個人総合　第6位**
  久保由有子　健康栄養学科4年

男子サッカー部　長野県サッカー選手権大会で準優勝

6月29日に行われた長野県サッカー選手権大会の決勝戦は、FC上田ジェンシャンに0-2で惜敗し、準優勝となりました。

当日は、学友会が結成してくれた学生による大応援団を中心に、教職員等の大学関係者はもとより、学園、同窓会及び後援会関係者の方々、OB・OG等々、本当に多くの方々より心のこもったご声援をいただきました。皆様からいただいた応援は、我々男子サッカー部の大きな力となりました。本当にありがとうございました。

後期のリーグ戦ではインカレ出場を目指し、精一杯戦っていきたいと思っております。引き続きご声援をお願いいたします。

（男子サッカー部 監督　齊藤　茂）

硬式野球部　「力戦奮闘」

硬式野球部は、9月6日から関甲新学生野球連盟秋季リーグ戦に臨んでいます。今季より従来の1～3部制度を変更し、長野・山梨リーグ、新潟・群馬リーグ、栃木・埼玉・茨城リーグの3地区による予選リーグを行ない、勝ち抜いた勝者が決勝リーグを行なうことになりました。

硬式野球部は開学以来本学を代表する学生スポーツとして誇りを持って闘ってきました。これまで1部リーグへの昇格や社会人野球（7名）やプロ野球選手（西武ライオンズ・DeNAベイスターズ・BCリーグ信濃7名・新潟1名）の輩出など誇るべき実績を残してきたと同時に、部員は大学生として勉学にも他の学生と同じように取り組み、学生野球の本分を大切にしてきました。

また地域に根差す本学の理念の下、日頃から地域への貢献も重視してきました。特に日頃から挨拶を欠かさず、最近も地元新村の方から「野球部員が地域の美化に取り組んでいる」とのお褒めのメールを頂きました。大学球場で試合を行なう際には近隣の方の応援もあり、地域にも愛される野球部として今後も頑張っていきますので、「力戦奮闘」を合言葉にひたむきに闘う硬式野球部に是非応援を宜しくお願い致します。

（硬式野球部 部長　白戸 洋）

リレーコラム
Relay Column

ホウレンソウとその伝え方

総合経営学科 教授　兼村　智也

私は、自分のゼミ学生に対して日頃の報告・連絡・相談、すなわちホウレンソウを怠らぬよう指導しています。学生側にも（遊び?の）都合で「ゼミを休みます」とか、「課題を忘れました」ということが時にはあるでしょう。私にも似たような経験がありますし、彼らの事情もわかります。その代わり、特に自分にとって都合の悪い、言いにくい内容ほどホウレンソウを怠らないこと、それさえ守れば大目に見ると言っています。大勢の学生が受講する授業だと困難ですが、顔も名前もわかるゼミではインタラクティブな関係ができるがゆえに、その際、お互いが気持ちよく付き合うためには、自分の行動をきちんと事前に説明することが必要だといえるでしょう。

社会に出れば、当たり前のことですが、その前段階の大学でもそうした自覚に乏しい学生が少なくありません。そこで今のうちからホウレンソウの習慣を身に付けて欲しいと思い、こうしたことをルール化しているのです。また言いにくいことを言わなければならないとなると、自然とその回数も減るのでは?という抑止力としての期待もあります。何度もホウレンソウを行うのはバツの悪いものですからね。

ところが、面と向かっては言いにくいことでも、メールを使えば、バツの悪さをあまり感じることなく、しかも事務的に処理できます。そうなると抑止力どころか、「ホウレンソウさえ守れば、何をしてもいいのでしょ?」とルールの目的が逆手にとられてしまう場合が少なくありません。スマホ全盛期の今、場合によっては研究室に来てもらうとか、少なくとも電話をしてもらうとか、その伝え方にも工夫をしないとホウレンソウの持つ意味がなくなってしまうのでは?と感じる今日この頃です。

Relay Column

軟式野球部　インカレ出場

2年連続出場 惜しくも初戦敗退

本学軟式野球部は全日本大学軟式野球選手権大会への2年連続出場を果たしました。初戦は8月17日に中野市営野球場で京都文教大学と対戦し、惜しくも1対2で敗退しました。さらなるチーム力の向上をはかり、来年の3年連続出場と初戦突破に期待します。

本学学生が第5回世界大学自転車競技選手権大会のマウンテンバイククロスカントリーの部に出場

本学自転車部の総合経営学科2年の相野田静香さんが、7月にポーランドで開催された第5回世界大学自転車競技選手権大会のマウンテンバイククロスカントリーの部に出場し、1周4キロのタイムトライアル13位、18キロのクロスカントリー12位の成績を収めました。

相野田さんは、昨年、ジャパン(J)シリーズクロスカントリー女子エリートクラスで、シリーズチャンピオンにも輝いた実績があります。今後の更なる活躍に期待します。

（総合経営学科 准教授　清水 聡子）

私立短大の二大体育大会に出場し健闘

短期大学部 学生委員　川島　均

短期大学部の運動系サークルの多くは、私立短期大学が集まる二つの大会への出場に向けて日々頑張っています。本年度は、全国大会が9月1日~4日、長野県大会が9月12日に行われ、いずれの大会も健闘を見せました。

女子卓球ダブルス3位、女子バレーボール3位 ―全国私立短大体育大会―

東京で行われた「第49回全国私立短期大学体育大会」には、本学から女子卓球、女子バレーボール、男子バスケットボール、女子バスケットボールの競技に、合計30名が参加しました。

中でも、女子卓球では2年生がダブルスで3位に入り、女子バレーボールでも下位リーグながら3位に入る健闘を見せました。女子卓球ダブルスのうち一人は昨年も3位でしたので、2年連続の入賞を果たしました。一方、女子バレーボールは4年前に準優勝して以来の表彰でした。

バスケットボールは男女とも1試合目で敗退してしまいましたが、最後まで粘り強い戦いをして相手を苦しめました。

主管校として運営面でも力を発揮 ―長野県私立短大体育大会―

長野県内の私立8短大が参加し、交流を深めることを目的に実施している「長野県私立短期大学体育大会」は、女子バレーボール、男女バスケットボール、女子バドミントンの競技で実施しており、本学はすべての競技に参加しました。その結果、女子バレーボール準優勝、男女バスケットボールと女子バドミントンが3位に入る健闘を見せました。短大生活の中で練習の成果を発揮する場としてはこの大会が最後という学生も多かったと思いますが、今後の短大生活でも楽しんで活動してもらいたいものです。

この大会は県内の私立短大が持ち回りで運営しており、本大会は本学が主管校として、多くの学友会メンバーも運営に参加しました。特に新たな試みとして、フットサルの公開競技やダンスパフォーマンスで構成した閉会セレモニーは、学生たちの頑張りもあり、大変盛り上がりました。

最後になりましたが、大会の開催にあたり松本市の各スポーツ協会、県内私立短大関係者の皆さま、そして松本大学関係クラブの学生には多くのご協力をいただきました。この場をお借りして御礼申し上げます。

Information

授業の内容や雰囲気を確認するチャンス!
高校生のための公開授業

本学での実際の授業の内容や雰囲気を確認していただけるように、通常の授業を公開します。
ランチ無料体験や、個別相談も受け付けますので、お気軽にご参加ください。

※事前申し込みは不要です。

●特別授業公開(全学部・学科)

[日時] 10/13(月) 9:30〜16:50

[内容] 総合経営 流通総論　栄養 食事摂取基準論
観光 社会活動　スポーツ 体力測定と評価
短大 サービスマーケティング　など

※各学部10〜20の授業を公開します。具体的な内容についてはホームページでご確認ください。

無料シャトルバス運行 松本駅からのみとなります。松本駅アルプス口(西口)
行き▶ ①9:00発 ②10:00発 ③11:00発 ④13:00発 ⑤14:00発 予約不要
帰り▶ ①13:30発 ②15:00発 ③16:00発 ④17:00発 予約不要

ご相談内容は何でもOK!
入試相談会 個別相談

入試、学費、奨学金、大学・短大の学びについて、学生生活など何でもご相談ください。個別に対応いたします。保護者の方もお気軽にご参加ください。
事前予約は必要ありませんが、事前にご連絡いただければご指定の時間に専門スタッフが対応させていただきます。

●入試相談会(全学部・学科)

[日時] 10/18(土) 大学祭『梓乃森祭』同時開催　11/22(土)
2015年1/22(木)・23(金)
10:00〜15:00

[開催場所] 本学

※送迎バスは運行しませんので、ご注意ください。

詳しくはホームページでご確認いただくか、入試広報室までお問合わせください。
ホームページ www.matsumoto-u.ac.jp　TEL 0120-507-200

第48回松本大学大学祭
『梓乃森祭』

[一般公開] 10/18(土) 10/19(日)
10:00〜

[テーマ] 「あのー、隣あいてます?」
〜きっかけはココから〜

■東国原英夫氏トークショー
10月18日(土) 12:30〜
〜地域社会の活性化〜 +地域づくりを学ぶ学生とのディスカッション
※当日無料整理券を配布します

■ファッションショー 10月19日(日) 13:00〜
松本理容美容専門学校生とのコラボによるファッションショー

■模擬店No.1を決める「M−1」開催! 二日間を通して開催
投票してくれた方から抽選で、松本山雅FC 反町監督や人気選手のサイン入りグッズが当たる!

■地域貢献大賞選考会 10月19日(日) 10:30〜
本学学生が実施している地域貢献の取り組みから大賞を選考します。

■波田少年少女合唱団Specialコンサート 10月19日(日) 14:00〜
青少年音楽祭特別金賞を受賞した皆さんが歌声を披露します!

※その他 ゼミ発表、各種イベント、模擬店など多彩な催しで皆さまのお越しをお待ちしています。

新刊情報

高齢者向けの投資教育図書
「シニアのための堅実な資産運用」

シニアがゆとりある日々を過ごすための分散投資、長期投資、積立投資による堅実な資産運用を分かりやすく説明。

藤波 大三郎 著／松本大学出版会
単行本／262ページ

ローカルとグローバル
—グローバル時代における大学教育—

昨年度実施した、文部科学省COC事業「松本大学公開講座in諏訪」を収録。6人の識者が"人"と"企業"のグローバル戦略と人材育成を考える。

松本大学COC連絡会議 編／松本大学出版会／A5版／200ページ

大学COC事業による「公開講座」「防災士養成講座」「みんなのカレッジ」を開催します。 詳しくはP.8をご参照ください。

編集後記

9月にはいり、秋の訪れを身近に感じる季節となりました。今回の特集は「高大接続・高大連携」です。「高校と大学が連携して次代を担う若者を育てる!」活動で、本学における取り組みを紹介しました。「地域立大学」を謳う本学が地域発展のために本気で取り組む活動の一端を知って頂けたら幸いです。私自身は13ページ掲載の「ひらめき☆ときめきサイエンス」に実験指導者として関わりました。参加してくれた高校生が自身のDNAを見たときの感動の表情、遺伝子型が分かったときの様々な反応をみて、実験等を取り入れた実践的な教育の重要性を改めて実感しました。

(記・広報委員長　髙木 勝広)

学校法人松商学園
松本大学
〒390-1295 長野県松本市新村2095-1
TEL 0263-48-7200　FAX 0263-48-7290
http://www.matsumoto-u.ac.jp/